

七高僧

③

曇鸞大師

今月は寺報四月号、六月号に続き、七高僧第三祖「曇鸞大師」を紹介したいと思います。

曇鸞大師の略歴

曇鸞大師は四七六(承明元年)中国大同府の雁門にお生まれになりました。若くして出家し、龍樹菩薩の思想である四論宗(『中論』『百論』『十二門論』『大智度論』)を学んだと伝えられています。その後『大集経』を読まれ大変難しくこの経の註釈をしようと思い立たれましたが、途中で病気になる、まず、長寿の法こそ大切と五十一、二歳の頃、長寿の法を陶宏景に学び仙経を得て北魏に帰っていきまされた。帰路の途中菩提流支に出会い、仏教にも仙経に説くような長生不死の法があるかと問いました。その時、

菩提流支は大地に唾をして、もし真の長寿を求めらるならこの書を読めと『仏説観無量寿経』(以下『観経』)を与えました(与えた書については諸説あります)。

曇鸞大師は『観経』を読んで深く感ずるところがあり、仙経を焼き捨てて、浄土教に帰依したと伝えられております。

このことを親鸞聖人は『高僧和讃』曇鸞讚に本師曇鸞和尚は仙経ながくやきすてて菩提流支のおしへにて浄土にふかく帰せしめきと讃げられています。晩年、曇鸞大師は玄忠寺にうつられ五四二(興和四)年に六十七歳で示寂されました。

曇鸞大師の著述・教義の発揮

曇鸞大師の著述で浄土真宗のお聖教となったのは『無量寿経優婆塞願生偈註』(『往生論註』)二卷(天親菩薩の『浄土論』を註釈された書物なので『浄土論註』ともいわれますが西本願寺では法然聖人が『往生論註』といわれていますのでそれにならっています。)『讚阿弥陀仏偈』一卷以上です。曇鸞大師のご功績は何といっても『浄土三部経』の中に出てこなかった「他力」ということを七高僧では初めてお示しにされたことです。もちろん、ここでいう「他力」とは他人の力ということではなく、「他力即自力」すなわち阿弥陀さまの力ということなのです。曇鸞大師の『往生論註』上巻の初めに龍樹菩薩の『易行

品』を引かれて自力と他力の判を示され、天親菩薩の教義は他力易行の教えに基づくものと明らかにされました。次に上巻の終りには浄土教の救済の対象は罪悪深重の凡夫であることを明らかにされ、下巻の終りには『仏説無量寿経』の第十八願、第十一願、第二十二願を引いて、『浄土論』に明かされる衆生往生の因果は阿弥陀さまの願力回向によるものであることを明らかにされました。

要するに『往生論註』の大意は、本願他力の回向が明かされ、逆悪の凡夫に広大無礙の信心(一心)を得させて、安樂浄土の往生と悟りの智慧を与えることを明かされたものということができましよう。だから親鸞聖人は『高僧和讃』の曇鸞讚に天親菩薩のみことをも鸞師ときのべたまはずば他力広大威徳の心行いかでかさくらましと讃げられています。

法語の世界

〈原文〉

ただ「聖人」と直に申せば 聊爾なり。「この聖人と申すも聊爾か」「開山」とは 略しては申すきかとのことに候ふ。ただ「開山聖人と申してよく候ふと云々」(『蓮如上人御一代記聞書 二百七十四

〈現代語訳〉

親鸞聖人のことをただ「聖人」としかにお呼びすると、粗略な感じがする。「この聖人と指し示しているのも、やはり粗略であろう。「開山」というのは略するときだけに用いてもよいであろう。「開山聖人」とお呼びするのがよいのである。

〈語句の解説〉

直に……じかに。直接 聊爾……粗略

盆踊り大会について

今年も8月14日、当山境内地使用の盆踊り大会は、新型コロナウイルス感染症拡大に歯止めがかからないため、ご遠慮いただきます。ご理解のほどよろしくお願います。

金光寺住職 松井卓郎

